

「100リルの音をさがそう」

—情報機器を利用した感性を育てる教育をめざして—

長野県岡谷市立小井川小学校 教諭 瀧澤 康弘

1 はじめに

子どもたちを取り巻く環境は、たくさんの音が洪水のようにあふれかえっている。そのせいか、教室での子どもたちの様子を見てみると、教室が静まりかえっているよりも、少し騒がしいくらいの方が落ち着いているようにさえ感じる。そこで、本実践では、騒がしい環境に慣らされている子どもたちに、「耳をすます」という行為を取り戻し、身の回りにある音に対して、関心を持ってほしいと考えた。

「耳をすます」という行為は、自分が行っていることを止め、心を落ち着け、聞くことに意識を集中しなければ行えない。この行為を繰り返して「耳をすます」という行為を、自らの技とすることで、心を落ち着けて物事に取り組んだり、友だちの話や身の回りの音に耳を傾けたりするなど、子どもたちの学習を支える基礎的な力となるのではないかと考え本実践を行った。



2 本実践で情報機器を活用することの利点

(1) ICレコーダー

- ・操作が簡単なので、子どもたちが気軽に利用することができる。
- ・今回利用したICレコーダーはデータがMP3形式で保存され、USB接続することで、ドライブ認識されるので、コンピュータとの相性が大変よい。

(2) グループウェアソフト（スタディノート）

- ・グループウェアソフトを利用することで、個々にまとめたデータを共有化することが容易にできる。
- ・蓄積されたデータがデジタルで保存されるので、大人になっても自分の学習を振り返ることができる。
- ・「子情報」のやりとりの中で、自分の活動に対する他者評価を受けることができる。

3 実践内容【3年生：総合的な学習の時間・音楽・学級】

○サイレントゲーム

音を聴く力を育てるために、「サイレントゲーム」を行ってきた。数分間身の回りにある音や体の中の音に耳を傾け、それを紙に書き出す活動である。その他に、楽器を使った「音作り」の活動など、音に親しむ活動を取り入れてきた。

○100リルの音がし

「100リル」というのは「きつつきの商売」というお話に出てくる通貨である。このお話の中できつつきは、自分が見つけた音を販売する。この話をきっかけに、自分たちでも音探しをスタートさせた。

ICレコーダーで1人1人、身近にある音を収集し、その中から、「100リルの音」のメニューにふさわしい音を選ぶ。グループウェアソフトでその音を選んだわけとその音データを貼った紹介ページをつくる。そのデータは「データベース」に貼ることで、お互いに聞き合うことができ、その音に関する感想や意見は「子情報」として寄せ合う。また、紹介ページは「きれいな音」「元気な音」など、子どもたちの選んだ基準に合わせて分類し、次の音探しの参考にする。

こうした活動を年に数回繰り返し、その中で気づいたことや感想、問題点について共有化したり、深めたりしていくことで、身の回りにある音環境に対する意識を高めていく。その学習内容や自分たちで作った音のメニューは1年間の活動のまとめとして地域に発信していく。

4 成果と課題

- ・自分で音探しをした上でページを作っているので、自分の作ったものを伝えたいという意欲が感じられた。
- ・実践を行ったクラスの子子どもたちが、本格的にコンピュータを学習に利用したのは、これが初めてだったが、同じ活動を繰り返していくことで子どもたちは無理なく、機器の操作をおぼえ、ネットワークを利用することで、コンピュータを情報交換のツールとして利用できることを学ぶことができた。
- ・「コンピュータで音をあつかう」という活動は、子どもたちだけでなく、先生方にも新鮮な感覚で受け止められた。
- ・「音」という変化する物を対象としているので、今回作成したデータベースは、時間がたつにつれてその価値を増す。
- ・回数を重ねるにつれ「友だちが見つけられない音をさがしてみたい。」という意識があり、かすかな音にも耳を傾けようとする姿がみられた。
- ・3年生の意識では、自分の身の回り（家の中を中心とした）に意識が強く、広い範囲での音探しへと意識が向いていかない。自分たちの地域固有の音に気づけるようになると、さらに活動の発展性がある。
- ・音環境（サウンドエスケープ）のあり方に、子どもたちの問題意識を広げていきたかったが、本年度は、その素地を育てるところまでで精いっぱいだった。来年度のテーマとしていきたい。